

1 主題構成表

主題名「真理を求めて」(中学校・第2学年) 資料名「日本歴史を求めて」(津田 左右吉)

<p>■ 内容項目 A (5) 「真理の探究、創造」 真実を大切にし、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること。</p>	<p>■ 内容項目から見た生徒の実態 (意識)</p> <ul style="list-style-type: none"> インターネットに掲載された書き込み、友人から聞くうわさなど、偏った狭い情報を絶対的に正しいこととして受け止め、信じてしまいがちである。 成果が表れないと、探究することを諦めてしまいがちである。 <p>(要因)</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な情報を興味本位でとらえ、思い込みや一方的な理解をしてしまうとともに、真理を探究する上で多面的・多角的に物事を見つめることの大切さに気付いていない。 困難を乗り越えながら真理を探究することが自分の生涯を豊かにすることを、実感を伴って理解できていない。 	<p>■ 資料の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> 歴史の研究に一生をかけた津田左右吉の生き方から、真理の探究によって得られる新たな発見、見方や考え方が自分の生涯を豊かにすることを考えることができる資料である。 津田左右吉が様々な文献を基に思想に関する歴史をひもとき、一つ一つの疑問を解決する姿から、真理を探究するためには、広い視野に立って多面的・多角的に物事を見つめることの大切さに気付くことができる。 広い視野から多面的・多角的に歴史を研究したことで手にした新たな発見、見方や考え方が津田左右吉の歴史研究の原動力になっていることに気付くことができる。 津田左右吉の真理を探究する姿と自分の生き方を重ね合わせることで、広い視野で真実を見つめ、真理を探究しようとする意欲を育むことができる。
<p>■ ねらい 広い視野に立って様々な視点や角度から物事を見つめ続ける姿勢が、新たな発見や見方、考え方を身に付けることにつながることに気づき、よりよい生き方や社会を求めて真理を探究しようとする態度を育む。</p>		
<p>■ 展開の構想</p> <ul style="list-style-type: none"> 幕末から明治維新について研究しようと考えていた津田左右吉が、真理を求め、江戸時代さらには上代の歴史まで調べる姿から、真理の探究には、広い視野に立って多面的・多角的に物事を見つめる必要があることに気付くことができるようにする。 津田左右吉が真理を探究し続けた理由を考えることで、新たな発見、見方や考え方の獲得が真理を探究する原動力になっていることに気付くことができるようにする。 津田左右吉の真理を探究する姿と自分の生き方を重ね合わせることで、広い視野で真実を見つめ、真理を探究しようとする意欲を育む。 	<p>■ 基本発問 (◎中心発問)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「どんなことでも、そのことだけを見つめていては、その内容の意味を本当につかむことはできない」と考え、広くその時代のことを知り、上代までさかのぼって研究をした津田左右吉の姿勢について、あなたはどのように思いますか。 ◎広い視野から歴史を研究することは大変なことです。津田左右吉は、広い視野から歴史を研究することで、どのような喜びを感じていたのだろうか。 ○今日の授業では、本当のことを明らかにするためには、視野を広げ様々な視点や角度から見つめることの大切さを学びました。今後、このことをどんなことに生かそうと思いますか。 	
<p>■ 「私たちの道徳」の活用 (授業前 ・ ◎授業中 ・ 授業後 ・ 活用しない) (活用の仕方) 授業の終末に「(4) 真理・真実・理想を求め人生を切り拓く (P 32)」を読む。</p>		

2 学習指導過程

	基本発問と予想される生徒の反応	指導・援助
導入	<p>○津田左右吉の生き方について説明を聞く。</p> <p>○「幕末から明治に興味があったのに、上代（奈良時代）までさかのぼり歴史を調べたのはなぜでしょうか。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> 津田左右吉が現在の美濃加茂市下米田の出身であることを伝える。 左記の発問によって問題意識を醸成する。
展開前段	<p>◇資料を範読する。</p> <p>○「どんなことでも、そのことだけを見つめては、その内容の意味を本当につかむことはできない」と考え、広くその時代のことを知り、上代までさかのぼって研究をした津田左右吉の姿勢について、あなたはどのように思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> すごいと思います。人生をかけて自分で決めた研究をしているからです。 素晴らしいと思います。広い視野で幕末から明治維新の歴史を見つめようとしているからです。 真理を求めてどんどん追究したことで、深い研究になったところがすごいと思います。 私は深く調べることなく、テレビやインターネットの情報をすぐに真実だと決めつけてしまいます。 立派だと思うけれど、大変な作業で僕には真似できません。 <p>◎広い視野から歴史を研究することは大変なことです。津田左右吉は、広い視野から歴史を研究することで、どのような喜びを感じていたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新しい真実の発見だと思います。新しいことが分かるので、頑張ろうという気持ちになるのだと思います。 広い視野で見たことで、同じ物を違った視点で見ることができるようになり、真実が見えてきたから、それが嬉しくて、やり遂げることができたと思います。 新しい発見や本当のことが分かるから、それが喜びになって大変な研究をやり遂げることができたのだと思います。 誰もが納得する歴史の真実が明らかになることが喜びになったからだと思います。 	<ul style="list-style-type: none"> 津田左右吉の研究に対する姿勢をどう思うかと発問することで、津田左右吉の生き方に対する自分の感じ方や考え方と向き合うことができるようにする。 「すごいと思う」「素晴らしい」といった発言に対しては、そのように感じた理由を多面的・多角的に見つめること、真理を探究する生き方のよさを感じ取ることができるようにする。 「自分は真似できない」といった発言を肯定的に受け止めた上で、「どの部分が真似できないか」と問い返すことで、津田左右吉の生き方の素晴らしさの中身を表出させる。 状況に応じて、「一つの物事を見て本当のことだと決め付けてしまうことはありませんか。」や「うわさやインターネットから得られる一つの情報を本当のことだと決め付けることはないですか。」と問いかけ、広い視野で多面的・多角的に物事を見つめることのよさに気付くことができるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>【深めの発問】 ★津田左右吉のように、広い視野から見たことで、新しい発見ができた、見方や考え方が変わったりしたという経験はありますか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 状況に応じて、「みんなは、夏休みの研究や勉強などで、新しい発見や真実が得られたときに嬉しかったことはありますか。」と問いかけ、津田左右吉の感じ方や考え方と自分自身を重ね合わせて捉えることができるようにする。
展開後段	<p>○今日の授業では、本当のことを明らかにするためには、視野を広げ様々な視点や角度から見つめることの大切さを学びました。今後、このことをどんなことに生かそうと思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 僕はすぐに決めつけしまうから、広い視野で見つめることができるようになりたいです。 私は友達から聞くうわさやインターネットに書かれた一つの情報を正しいことだと受け止めていました。広い視野で見つめ、新しい発見ができる生き方をしたいです。 	<ul style="list-style-type: none"> 展開後段では、「広い視野」「正しいこと」という視点を示し、道徳的価値を自分との関わりで捉え、自己を見つめ直すことができるようにする。行為のみを書いている生徒には、「どんな気持ちや考えからこの行為をしたいと書いたのか。」「いつもはどんな気持ちでこの行為をしていたのか。」など、自分の心の中や、心の傾向性を見つめることができるようにする。
終末	<p>◇津田左右吉博士記念館（下米田）に展示してある資料を見る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 真理を求めて努力した生き方に学びたい。 一度書いた文章に何度も修正を加えています。広い視野から見つめ直していることが分かりました。 <p>◇「私たちの道徳」「（４）真理・真実・理想を求め人生を切り拓く（P32）」を読む。</p>	<p><変容の見届け></p> <ul style="list-style-type: none"> インターネットの情報を鵜呑みにする傾向にある生徒が「広い視野で多面的・多角的に物事を見る必要がある」ことを書いている。 困難を乗り越えて真理を探究する姿勢に弱さの見られる生徒が「新たな発見、見方や考え方を身に付けることによって喜びが得られる」ことを書いている。

3 道徳の時間（道徳科）と他の教育活動との関連

<場の内容・ねらい>

<生徒の意識>

<指導・援助>

<p>理科（6月） 「化学変化と原子・分子」 ・化学変化に関係する物質の質量を測定する実験を行い、表やグラフ、原子・分子モデルの活用など、多面的・多角的に事実を分析・解釈し、反応する物質の質量の間には一定の関係があることを見いだす。</p>	<p>【日常の活動】 ○帰りの会 「学級の諸問題の解決」 ・学級に生じた諸問題に対して、広い視野から多面的・多角的に問題点を見つめ、解決案を具体的に提案することができる。</p>	<p>・表やグラフをどのように分析・解釈したらよいか分からない。 ・表やグラフなどを様々な角度から見つめると、新しい発見ができて楽しかった。 ・原子・分子のモデルを用いて考えると、自分が発見した法則を誰かが納得できるように説明することができた。</p>	<p>・算数・数学で学習した表やグラフの見方を示す。X軸の変化に伴うY軸の変化や、グラフの傾きに注目するなど、事実を多面的・多角的に分析することができるようにする。 ・モデルを活用して普遍的な法則が成り立つことを説明した生徒を価値付ける。</p>
<p>道徳科（6月） 「一歩ずつ 松井秀喜」 内容項目A（4） 「克己と強い意志」 ・身近な目標を定め、困難や失敗を乗り越える努力の大切さに気付き、より高い目標に向かって段階的な目標を設定し、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げようとする心情を育てる。</p>	<p>○帰りの会 「期末テストの計画」 ・より高い目標を設定し、その実現に向けて、段階的に取り組むことができる具体的な学習内容と取組方法を書きまとめることができる。</p>	<p>・自分は一つの情報から短絡的に判断をしていた。〇〇さんの意見のように、広い視点から物事を見つめることが大切だ。</p>	<p>・学級で生じた諸問題に対して、広い視野から解決案を提案した生徒の姿勢を価値付けるとともに、その生徒の思いを引き出す。</p>
<p>道徳科（6月末～7月初） 「真理を求めて」（津田左右吉） 内容項目A（5）「真理の探究、創造」 ・広い視野に立って様々な視点や角度から物事を見つめ続ける姿勢が、新たな発見や見方、考え方を身に付けることにつながることに気付き、よりよい生き方や社会を求めて真理を探究しようとする態度を育む。</p>		<p>・テストでよい点数は取りたいけれど、期末テストの勉強は面倒だ。 ・松井秀喜のように、自分にできる小さな目標を立てよう。1週間ごとの目標と取り組む具体的な学習内容を明らかにした計画を立てよう。</p>	<p>・1週間単位で小さな目標、具体的な学習内容を計画できるプリントを配布する。 ・理想に向けて努力した足跡が認識できるようにすることで、困難に直面した際に挫折して諦めることがないようにする。</p>
<p>学級活動（7月） 「夏休みの自由研究 計画立案」 ・夏休みをかけて粘り強く取り組み、新しい発見や、新たな見方や考え方の獲得ができるように、多面的・多角的に物事を見つめ段階的に取り組める具体的な計画を立案することができる。</p>		<p>・僕はすぐに解決を急いで決め付けしまうから、広い視野で見つめ、新しい発見ができる生き方をしていきたい。 ・真理の探究によって新しい発見や、新しい見方や考え方ができるようになることが、人生をよりよくすることが分かった。</p>	<p>・問題解決的な学習を行い、自己の生き方に関する課題に積極的に向き合えるようにする。 ・「主人公の生き方をどう思うか」と発問することで、真理を探究する津田左右吉の生き方に対する自分の感じ方や考え方向き合うことができるようにする。</p>
		<p>・多少の困難があっても挫折することなく、新しい発見ができるように、広い視野から研究を進めていきたい。</p>	<p>・内容項目「克己と強い意志」「真理の探究創造」の2つの視点で、夏休みの自由研究の計画づくりを見届ける。</p>

大正五年（一九一六）から十年（一九二一）にかけ、「文学に現れた我が国民思想の研究」という、四冊の本が次々と出版された。岐阜県の生んだ、近代日本を代表する歴史学者であり、東洋哲学者でもある津田左右吉の著書である。

左右吉がこの研究に入ったのは、明治三十三年（一九〇〇）、二十七歳のときであった。最初の一冊を世に出す十六、七年も前のことである。このころ、彼は、千葉県の中学校で歴史の教師をしていたが、「学問研究者として歩みたい。」という強い望みをもっていた。しかし、そのための時間もなく、研究にも打ち込めず、思い悩む毎日が続いた。

このころ、幸いにも、東京のドイツ学協会から、彼に来てほしいという要請があったのである。なんとしても心のもやもやをふつきりたいと思っていた彼は、これを転機に学問研究者として生きようと決意した。

左右吉は、明治の初めに、^{しもよねだ}下米田（今の美濃加茂市）で生まれ、新しい社会の発展とともに育ってきた。それだけに、明治維新には深い関心をもっていた。そこで彼は、幕末から明治維新のことについて、思想の面から考えてみることにした。ヨーロッパ文化から学ぶために、まず、幕府が取り寄せた書物を読むことから始めた。これが研究の始まりであった。ところが、一つ疑問を解決しようと思つてそれにかかわる書物を読むと、それは解決しないまま、また新しい疑問が生まれてくるのである。また、一つの疑問を解決したことにより、別の新しい疑問が生まれてくることも数多くあつた。こうして、次々と疑問が増していったのである。

いつものように机に向かつていた彼の頭に、ふと、こんな思いが浮かんできた。

「どんなことでも、そのことだけを見つめていては、その内容や意味を本当につかむことができないのではないか。もつと広くその時代のことを知り、さかのぼつ

て、その時代の初めからの文化や社会の情勢や歩みを知らなくては……。」

こうした研究方法に気付いた彼は、さつそく翌日から、江戸時代の初めにさかのぼって研究を始めた。しかし、江戸時代に書かれた書物は、何種類もの写本として伝わっているものが多く、まとまった形ではなかなか思うように手に入らない。そこで、勤めのかたわら、比較的良好に集められ、整理されている上野の図書館へ寸暇をおしんで通った。こんな生活が四年ほど続いたのだろうか。江戸時代の書物を直接自分で読み、考えているうちに、どうやらこの時代の思想の動きや、そこに生きた人々の見方、考え方、感じ方などが分かり、それについての左右吉なりの考えも出てきたのである。研究者としての自信も生まれてきた。原典を直接読み、考えてきた左右吉には、これまでのものとはちがった見方ができるようになってきていたのだ。しかし、一方で、自分の考えをもっと確かなものにしていくためには、江戸時代の研究だけをしては不十分であることに気が付いた。江戸時代の人々のものの見方、考え方、感じ方は、もっと昔からの人々の生活に深くかかわり、その歩みの中ででき上がってきていると思われたのである。

こうして彼は、前の時代、前の時代へと引きずられるようにさかのぼり、いつのまにか上代にまでたどりつくことになったのである。彼の大きな学問的業績の一つに、古事記・日本書紀の研究に代表される古代史に関するものがあげられるが、その出発はここにあつたともいえる。

明治維新のことから始まって、古事記・日本書紀の時代にまでさかのぼって研究してきた左右吉は、今度はこれまでとは逆に、上代から始めて近代に下っていくという順序でまとめていこうと思った。

これが、最初に述べた「文学に現れた我が国民思想の研究」だったのである。

書き始めてみると、今まで分かったと思っていたことが分からなくなり、もう一度原典を読み直して考えてみなければならないことが、次々と出てきた。ときにはかなり書き上げたものを、満足できずに破り捨てたこともあつた。また、日本のことを本当に分かるためには、世界や民族の神話や、特に、日本の文化にかかわりの

深い中国や朝鮮のことを研究する必要を痛感した。中国や朝鮮の古い歴史や古典の研究は、絶対に欠かすことができないことだったのである。彼は次第に、この方面にも力を注ぐようになった。

こうして、幕末から明治維新への一つの関心から出発した彼の研究は、真理を求めてどんどん枠を広げ、その内容も深くなっていったのである。書きあがった本は、彼の代表作の一つとなり、その後の彼の研究の方向や、学問姿勢の基となる意義深いものになった。

出典 岐阜県教育委員会 郷土の道德「郷土史研究にうちこむ」

(平成十三年十一月)

1 主題構成表

主題名「自然への畏敬の念」(中学校・第2学年) 資料名「槍ヶ岳の開山」(播隆上人)

<p>■ 内容項目 D(21) 「感動、畏敬の念」 美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。</p>	<p>■ 内容項目から見た生徒の実態(意識) ・美しい自然を守ることは大切であることは分かっている。また、自然に関わる不思議なことや神秘的なことに興味がある。 ・身のまわりに豊かな自然があるが、その存在について、感謝や感動の気持ちを忘れがちである。 (要因) ・人知や想像の範囲を超えた自然現象や事象、空間を目の当たりにする機会は少なく、そういった自然の不思議さ、恐ろしさ、美しさについて考える経験が少ない。 ・自分たちの住む町には美しい自然が多いと感じても、自然が生活の中に溶け込み、自然から生命を感じ取ったり、心のつながりを見いだしたりする機会が少ない。</p>	<p>■ 資料の分析 ・本資料は、偉大な大自然に感動し、「人間は様々な意味で有限であり、自然を通して人間の在り方や人生を見つめてきた」播隆上人の生き様を記したものである。 ・笠ヶ岳から荒々しい岩ばかりの峰が峰々を抜いてそそり立っている槍ヶ岳の雄姿を見た時の感動を、写真や映像を用いて資料提示をしながら伝えることで、言葉では表せない胸の震えを想像することができる。 ・生涯をかけて開山のために努力できたのは、槍ヶ岳の雄姿を見た時の感動が心の支えになっていたことや、努力の末、槍ヶ岳の頂上に立つ播隆上人の心の中に、人間の力をはるかに超えた大自然の美しさや神秘さ、荘厳さに触れ、独善的になりやすい人間の心を振り返ることができたという喜びがあったことに気付くことができる。</p>
--	---	--

■ ねらい
限りない自然の美しさや神秘さ、荘厳さに触れることが、人の心を動かし、生き方を見つめ直すことにつながることに気づき、自然を敬おうとする心情を育てる。

<p>■ 展開の構想 ・播隆上人の槍ヶ岳の雄姿を見た時の感動を理解する。 ・独善的になりやすい人間の心を振り返ることができた喜びとともに、自然に対する尊敬の気持ちを感じていることに気付くことができるようにする。 ・自然に対する「畏敬の念」について、自分との関わりで捉え、自然から感じる仲間の様々な感じ方に触れることができるようにする。 ・「畏敬の念」について、自分なりに多面的に捉えられるようになったことを価値付ける。</p>	<p>■ 基本発問(◎中心発問) ○播隆上人は、なぜ、槍ヶ岳に登りたいと思ったのでしょうか。 ◎槍ヶ岳の頂上に立ってまわりの世界を見た時、播隆上人は、どんなことを感じたのでしょうか。 ○「播隆上人が感じたこと」と「これまでの自分自身の自然に対する思い」とを比べた時、共通する感じ方と異なる感じ方はどんなことですか。 ○自分と自然とのつながりを振り返った時、これから、どんな時に、播隆上人が感じたような自然への思いをもつことができるのでしょうか。</p>
---	---

■ 「私たちの道徳」の活用(授業前・授業中・授業後・活用しない)
(活用の仕方) P114~116を読み、自然の美しさ(P115)や自然の不思議さ(P116)について考えを書く。